

「叙述トリック短編集」 似鳥 鶏 著 講談社 2018年9月発行

叙述トリックとは、作者が地の文でミスリードをすることで読者を騙すトリックである。例として筆者の所属する技術創造部について、こんな文章を上げよう。

「技術創造部には1人の技術長と2人の技術長補佐がいる。さらに、第一技術グループと第二技術グループがあり、それぞれに1人のグループ長がいる。各グループにはグループ長を除き、第一技術グループに5人、第二技術グループに3人のメンバーがいる。」

この文章を読んだのちに、技術創造部の人数を考えてほしい。すなわち、技術長①、技術長補佐②③、第一技術グループ長④、第二技術グループ長⑤、第一技術グループ職員⑥⑦⑧⑨⑩、第二技術グループ職員⑪⑫⑬

といった具合である。しかし、実際には現在の技術創造部には11人のメンバーしかいない。

これはどういうことだろうか？実情を知っている者からすれば、技術長補佐とグループ長を兼任している人物が二人いるということではしかないのだが、これを隠せば人数を意図的にごまかすことができる。このように、嘘はつかずに一部の情報を隠すことで読者に勘違いを誘発し、謎を難解にするのが叙述トリックである。

筆者はこのような叙述トリックが大好きである。ミステリーは推理する時間と解答がわかった上で読み直す時間の2回楽しめる作品であるが、叙述トリックの場合はその後者がより強調された作品だといえる。それまで脳内で補完していた思い込みが覆され、「そうだったのか！」と最初から読み直す時間がたまらなく楽しい。

しかし、「この本は叙述トリックが面白い本です！」などと書かれたレビューはその作品の価値を5割(筆者調べ)は落としてしまう。叙述トリックは叙述トリックであると思わずに読んだときが最も楽しめるのである。ゆえに人に勧めづらいジャンルでもあるのだが、本書はその欠点を見事にクリアしている。なにせタイトルに叙述トリックの短編集であると明記されているのだから、これは隠す必要もない。

ということで人に勧めやすい叙述トリックの本としてこの本をお勧めする。この本を読んで叙述トリックをもっと読んでみたい！と思った人には○○○○○○○○○○や○○○○○○○○○○などがおすすめである、と書けないのが歯がゆいところである。